

今回も約30年前の昔話です。ワシントンの連邦議会で働いていた時、朝駅付近で財布を落としました。オフィスでスタッフに相談すると、「無くした財布が出てくる率は1パーセントもないんだよ。」と言われた次の瞬間に電話が鳴り、駅近くの小学校の先生が「生徒が財布を拾った」と言ってきてくれました。お礼をしたくお父上に電話すると、「それは嬉しい。うちはイスラム教の神からの教えで良いことをするよう子ども達に教育している。お礼よりもうちに来て一緒に夕飯を食べながら話してくれないか」ということで、ケーキとお花を持って伺いました。お家は治安のよくない地域にある簡素な建物で、ツアーと称して全室見せて下さいました。一番広いリビングは子ども部屋でおもちゃや絵本が沢山あり、3人がにぎやかに遊んでいました。父母の寝室は3畳ほどの物置部屋にベッドがあるだけでした。美味しいご飯を頂きながら、大事な財布を守ってもらったことに感謝し、ご家族は子どもが良きことをしたと大いに喜んでおられました。中東からの移民で、父母がそれぞれ三つの仕事を掛け持ちし、必ずどちらかが家にいて子ども達を守るよう「シフト」されていて、「一番の教育を受けさせて、この国で成功させる」との強い意志を持っておられました。

こうした「親の子どもへの強い愛情」は、国や文化が違えどさくらの保護者さん達からもずっと感じ続けていて、重なる度にじわーっと涙が溢れます。古今東西を通じてこれほど素晴らしいものはなく、どんなに大変な時でも乗り越えて行ける強い原動力であると讃えたいです。

園長 山内 香幸